

カントはそれを、das Ding an sich（物自体）という言い方で表現したのかもしれないし、フロイトもまたそのカントを引用して、Ding と言っているし、ラカンもまたそれをひいて、la Chose、大文字の la Chose というような言い方をしています。

つまりわれわれが操作し得るもの、知り得るもの、判断し得るもの、それら全ては徹頭徹尾、知覚によって再構成された世界であるということ、もっと言うならば、その知覚によって再構成された世界を形作っているものはシニフィアンなのである、と。つまり「差異」、ひとつひとつが特定の意味を持つことのない差異の集合である、と。そのなかでもとりわけ、いわゆる言葉というものの、言葉はシニフィアンの集合に他ならないのです。

Make Believe

ただ言葉というのはシニフィアンが集合したものではなく、言葉には言葉の独自の構造がある。その構造の一番突出しているものは何かというと、Make Believe の構造です。

これも分析哲学用語です。われわれはこの世界において何らかの形において、Make Believe を行なっているわけです。何かを信じている。あるいは何かを信じようとしている。そういう「何かを信じる」という構造が、われわれの言語の構造の中に紛れ込んでいるのです。ある人はそれを「真理」と呼ぶかもしれないし、ある人はそれを「欠如」と呼ぶかもしれないし、ある人はそれを「論理」と呼ぶかもしれないし、ある人はそれを「神」と呼ぶかもしれないし、いずれにしてもわれわれは何かを信じて、あるいは何かを信じる振りをしてしか生きていけない、という決定論的な構造の中に投げ込まれているのです。その決定論的な構造というのは、言語が作り出す構造であり、ラカンはそれを「大文字の他者」と呼んでいるわけです。つまりわれわれがわれわれ自身だと思っているそのわれわれ自身が構造化している、あるいは作り上げているものは、他でもない「他者」、他者そのものである。つまり徹底した「他者性」の上にわれわれの個が作られているというこういう逆説、パラドックスがある。

そういう観点から、われわれが素朴に自分は現在、過去、未来を通して、同一のものであって、同一の思考をしていて、同一の立場を保持している、というような素朴な考え方を一回、括弧に入れておく必要がある。括弧に入れておかないと、自分の精神すら自分を裏切ることがあるのです。つまり簡単にその罠にはまってしまう。たとえば常識という罠かもしれないし、なんらかの Make Believe の罠かもしれない。言語で構成された世界の中には色々な罠が仕掛けられていると思った方がいいですね。常識という罠、慣習という罠、ここで笑うとか、朝会ったら「おはよう」と言わなければいけない、とか、色々な罠が仕掛けてあるわけです。ですからそれぞれの罠に対して一つ一つ繊細でなければならない。斉藤恵一さんの言葉を借りれば、「肌理（キメ）のこまかい」感性が必要なのでしょうね。

ビブリオフィリア逍遥遊 (5)

伊藤 敬

わたしの16ミリ映画体験

わたしは、年間数百本の映画を劇場などのスクリーンで見るといったタイプの映画好きだが、数年前に、映画の見た方をより深くできるのではないかと、イメージフォーラムの16ミリ映画制作講座の夏期講習に参加したことがある。これは、大人になってからピアノの初歩の教則本をかじると、プロになるのはおぼつかないにしろ、音楽の味わい方が格段に深くなる(わたしは、バルトークの教則本「ミクロコスモス」に挑戦しているが、忙しさにまかして第2巻の途中からなかなか進まない)というのと同じような理由からである。いま、イメージフォーラムや映画美学校の夏期講座の募集が行われている最中であるが、参加を検討されている人のために、わたしの経験にもとづいて、効果的と思われる入門講座への参加法を考えてみるのも、あながち無駄なことではないであろう。

まず、イメージフォーラムで使われるテキストは、日大芸術学部映画学科の先生たちの共同執筆になる「映画制作のすべて」(写真工業新聞社)である。この本は16ミリ映画制作に必要な知識を網羅的かつコンパクトにまとめたもので、しかも、版を重ねるごとに細かい改訂が施されている模様であり、この本を使いこなせるようになれば、初心者の方には、ほぼ卒業ということになる。しかし、これは教科書と参考書の間位置する本で、必ずしも独習に適しているとは言えない。もう少し親切な類書としては、西村雄一郎氏の「一人でもできる映画の撮影」(新泉社)があるが、これは、いろいろな巨匠たちの技法をいかにビデオ撮影に応用するかという観点からまとめられたもので、便利である反面、あくまでもビデオ撮影を前提とした本なので、フィルムの画質にこだわる人にとって記述は不十分であり、また、これを読むほどの意欲があるのなら、さらにダニエル・アリホンの「映画の文法」(岩本憲児、出口丈人訳 紀伊国屋書店)というプロ仕様の本にも手を伸ばした方が賢明であると思われる。

さて、イメージフォーラムの夏期講座の体験談に戻る。この講座は8月の10日間を費やすもので、昼クラスと夜クラスがあって、昼は金井勝、夜は奥山順市という実験映画の世界では相当に名の知られた監督が、じかに指導にあたっておられる。講座は、まず代表的な3タイプの16ミリカメラにじかに触れることから始まり、カメラ1台ごとに6、7名のグループに分かれ、それぞれのグループで数分程度の短編映画を撮ることを目的として、講義と演習がないまぜになったようなかたちで進められていく。わたしは、仕事があるので迷わず夜クラスを選び、奥山監督の飄々としてポイントを逃さない指導ぶりには捨てがたいものを感じたが、もし時間に余裕があって、どちらのクラスにも参加できるのであれば、昼クラスへの参加の方をお勧めしたいと思う。理由は、講師の力量の問題ではなくて、

短編映画をまとめるためのグループ内でのディスカッションの時間が、夜クラスでは十分に取れないからである。このディスカッションは、講義時間外の、いわば「課外演習」となるのだが、初顔合わせの初心者同士で、講座の半ばに行われるロケーションまでに、シナリオが上手くまとめられないからである。グループの中では、わたしが一番年長だったが、「お小遣いを貯めて来ている高校生や大学生の意思を尊重すべきである」などと下手な遠慮をして、スタッフの一人に徹したおかげで、結果として、シナリオなしに近いかたちで、聖蹟桜ヶ丘の河川敷周辺のロケ地でも、あえてでもないこうでもないディスカッションを続けるはめに陥ったのである。その「作品」の出来映えについては、あえてコメントを控えるべきであろう。ただ、最終日にこの講座の全グループの作品を試写で見て、あらためて感じさせられたのは、食べ物を美味そうに撮ることが、いかに難しいかということである。(そう言えば、日本映画で本当にメシを美味そうに食べる役者といえば、勝新太郎と斉藤由貴、それから子役時代の二木てるみぐらいではないか!)

それはともかく、この講座で用いたカメラは、画が美しく取れるアフレックス、特殊な撮影法に対応しやすいボレックス、簡単な操作で一定の質を確保できるキャノンスクーピックの3種で、いずれもサイレントである。もっとも、前2者はフィルムの駆動音が大きいので、同時録音はかなり難しいだろう。アフレコはどうするのかという質問に対して、講師の助手を勤めていた澤さんという映像作家の回答がふるっていた。「安くあげたいのなら、隣で8ミリビデオを同時に回して、その音を16ミリの仕上がった作品に合わせて編集した上で、現像所に対して『このビデオの音を焼き付けてください』と頼むのが現実的ですね……。」

実際に、自分で16ミリ映画を作製するとなると、カメラとフィルムと編集用の機材を調達しなければならないが、16ミリは曲がりなりにも「プロ」の世界で、フィルムもヨドバシカメラやビックカメラでは入手できないので、専門の業者のところに赴かなければならない。フィルムは100フィート、約3分で5000円前後、編集で3割程度のロスが出ると仮定して、アフレコまで行くと、フィルム関係の経費は、完成品1分につき約1万円強、カメラは中古で、安くてもちゃんと動くものという15万円前後、レンタルだと一日2万円ぐらいになる。

と、ここまで分かっただけで、あとは創作意欲が湧き次第、映画を取るという行動に移ればよいのだが、かえってそのように安心したおかげで、いまのところ、わたしには、映像表現に対する創作意欲が湧きざしは見えてこないのである。

(いとう・けい 図書館司書・学芸員)